

Title	追悼 岩男壽美子先生：岩男壽美子先生へ感謝の思いを込めて
Sub Title	
Author	萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2018
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research). No.68 (2018. 3) ,p.117- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20180300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



岩男壽美子先生へ 感謝の思いを込めて

萩原 滋

岩男壽美子先生は、2018年1月11日に83歳でお亡くなりになりました。その手短なメッセージをネット上で発見したのは、13日朝のことでした。情熱をもって取り組んでおられたタンザニアのさくら女子中学校への思いを綴った年賀状をいただいたばかりで俄かには信じがたく、意を決して、ご自宅に電話をかけてみました。岩男先生が出られて「そんなデマが」と大笑いになることを期待していたのですが、ご子息から近くのジムで日課にしていた水泳の最中に大動脈剥離を起こして病院に搬送されて亡くなられたのだと告げられました。葬儀の日程もうかがったのですが、矢も楯もたまらず、その日にご遺体の安置された恵比寿のお宅に出向いて、お別れをさせていただきました。近親者で営まれた葬儀には、かつての教え子たちも参列していましたが、突然の死に皆が驚愕すると共に、衰えをみせることなく全力疾走で旅立たれたのは、いかにも岩男先生らしいという声が多く聞かれました。こうして葬儀は終わりましたが、4月に予定されている「しのぶ会」の詳細は未定の段階で気持ちの整理も完全にはつかないまま、この追悼文を記すことになりました。

文学部で心理学を専攻して1957年に卒業後、岩男先生はフルブライト奨学生として渡米して1962年にイェール大学で博士号を取得、その後ハーバード大学での短い勤務を経て、1963年に新聞研究所（現メディア・コミュニケーション研究所）助手に就任しています。そして定年選抜制を利用して1999年に64歳で武蔵工業大学（現東京都市大学）に移られるまで、実に36年の長きにわたって慶應義塾大学で教鞭をとられたことになります。1981年に文学部に人間科学専攻が開設されると、研究所に加えて、文学部でも研究会を担当し、1984年からは社会学研究科の委員も兼務されていますので、岩男先生に直接の指導を受けた学生数は、正確に把握するのが難しいほどの水準に達しています。

私が岩男先生に最初にお会いしたのは、社会学研究科に設置された社会心理学の授業を1974年に履修した時のことです。1970年に経済学部を卒業後、アメリカで心理学の修士号を取得して帰国、1973年から社会学研究科の博士課程に在籍していたのですが、最初の年は時間割の都合で履修できず、2年目にしてようやく自分の関心にぴったりの授業に出会うことができたと言ったのを覚えています。それは岩男先生が助教授から教授に昇任される頃のことでしたが、翌年も同じ授業を履修した時に、その当時、新聞研究所とアメリカのフレッチャー大学院大学を母体に進められていた国際コミュニケーション・日米共同プロジェクトを手伝ってくれないかと誘われて、現在の南館の場所にあった第2研究室2階の研究所に出入りするようになりました。1976年に博士課程を修了すると新聞研究所の研究員・非常勤講師に任用していただき、諸外国の対日イメージや在日及び帰国留学生の調査、テレビ暴力の内容分析などを一緒にするようになりました。1980年に千葉大学に就職した後も研究所と文学部の非常勤講師をしながら、岩男研究室を根城に共同研究を継続し、さらに大学院校舎7階に移った研究所に1987年に助教授として着任した後は、研究室が隣り合わせということもあり、研究や会議などの業務以外でも頻繁にお会いするようになりました。岩男先生とは2冊の共著書以外に、随分と多くの共著論文を書きましたし、社会心理学会などで何回も連名発表をさせていただきました。ただ1997年に研究所の研究教育基金の補助によるプロジェクトが新たに編成された際に、私は岩男先生のもとを離れ、自分が主催する研究プロジェクトを立ち上げることにいたしました。

私が直接に知りえたのは研究や学内業務といった領域に偏っていますが、岩男先生の活躍の場は、そうした狭い領域をはるかに超えて大きく広がり、さまざまな政府関係の審議会などで女性有識者として真価を発揮されています。主だったものだけでも国家公安委員会、外務人事審議会、男女共同参画審議会、電波監理審議会などの委員を務められた他、海外向けの英文誌「ジャパンエコー」の編集長や「皇室典

範に関する有識者会議」の委員などを歴任し、2007 年秋には旭日重光賞を受勲されています。卓越した英語力と豊かな個性、独自の発想でダニエル・ベル、イシエル・デ・ソラ・プール、エリユー・カツといった海外の著名な研究者と親交を深められた他、国連特別総会「女性 2000 年会議」では日本首席代表を務めるなど国際的な舞台での活躍も際立っていました。いくつもの仕事を抱えて、研究所在職中はとても忙しくされていましたが、何か新しいことに挑戦したい、学びたいという意欲を失うことなく、多忙な生活の中で中国語を習ったり、書道や陶芸の教室にも通われていました。何かを学ぼうとする姿勢や向上心は、その後も一貫しており、ここ数年の日課とされていた水泳でもバタフライの習得に努められていたようです。昨年末に岩男先生からいただいたメールには「私がバタフライでエンマ大王をのけぞらせるのと習得できないうちに呼び出されるのとどちらが早いか」といった意味深長な一節が含まれていました。

私は岩男先生が慶應を退職されるまでの 12 年間を研究所の同僚として過ごし、副所長や邦文紀要編集の仕事を引き継いだ他、文学部人間科学専攻での研究会や社会学研究科委員を担当するなど、残した足跡の大きさは別にして、岩男先生が学内で歩まれた道をそのまま辿ってまいりました。また 2013 年に慶應を退職後、立教女学院短期大学に職を得たのも岩男先生のお力添えによるものでした。定員割れをした英語科を現代コミュニケーション学科に改組することに立教女学院の理事として深く関わられていた岩男先生から新学科の学科長にと声をかけていただいたのです。こうして自らのキャリアや人生を振り返ってみると、いかに岩男先生から大きな影響を受けたかに思い至ると同時に、その存在の大きさを再認識しているところです。

岩男壽美子先生、長期にわたり、たいへんお世話になりました。改めてお礼を申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈りいたします。

(2018 年 2 月 8 日)

萩原 滋（立教女学院短期大学教授、慶應義塾大学名誉教授）